●優秀賞

「読書会」を活用して教育活動をつなげる

－副校長の挑戦－

東京都三鷹市立第四中学校　赤荻千恵子（あかおぎちえこ）

1. 本研究のねらいと方法

1.1. 本研究のねらい

国語科教師として生徒に向き合っている時から、私の課題は「読書活動をいかに生徒主体の活動にするか」ということであった。生徒の読書活動を形式にとどまらず、実質的な取組にまで高めたいという強い願いである。生徒が自発的に本を読み、読書は楽しいことだと実感できる土壌を作りたい。副校長という位置から、生徒、教職員や保護者・地域社会等、学校の教育活動を形成している諸要素を活用するという視点からその方策を考えた。「生徒の読書会」を開くに当たって学校の教育活動の様々な場面を活用する。また教職員が読書会のテキストについて語り合う「教職員の読書会」や「保護者・地域の方との読書会（「読書を通して、中学生について副校長と気軽に語る会」とＰＴＡが命名）」を設けたりして、読書会を軸に、教育活動を有機的に連動したいと考えた。日々の教育実践を連動させ、広げていくことは教育課程全体を掌握し管理する副校長こそができる仕事である。

1.2. 本校の読書活動の実態

本校では、今年度より読書活動の推進を学校経営方針の重点の一つに掲げた。昨年度までは、読書指導に学校全体で取り組む姿勢はなく、国語科や各学年のそれぞれの取組に任せられていた。そこで、本年度は読書習慣の定着を図るための具体的な活動として、通年の朝読書の時間の設定・「チャレンジ読書週間」の実施・「読書一万ページ」の取組（一万ページを目標に読んだ本のページ数を記録していく取組）に学校全体で取り組んでいる。また学級文庫の充実・図書館利用の活性化や保護者等への啓発に力点を置くこととした。

1.3. 読書活動を推進するための副校長としての提案

上記のねらいを達成するために、以下の取組を副校長から国語科の教諭、図書委員会の担当教員（司書教諭）、図書館司書そして PTA 役員に提案し、協力を求めた。

国語科教諭、司書教諭には「読書になじみの薄い生徒に興味をもたせるために、朝読書の時間に、読み聞かせ等の活動を取り入れたい。」「副校長が中心となって、読書会を開くので、それぞれの持ち場（国語科の授業・図書委員会の活動・図書館の運営面）で有意義な読書会となるよう協力してほしい。」司書教諭、図書館司書には「図書館の利用の活性化を図るため、入館者、貸出冊数を増やす工夫をしてほしい。隣接の第三中学校との読書会開催のため、事務連絡や開催の準備を司書同士連携して担当してほしい。」PTA 役員には「副校長と保護者・地域の方との読書会を定期的に開きたいので、保護者・地域への

広報、当日の運営等、是非協力してほしい。」と伝え、各々に行動を起こしてもらった。

1.4.　具体的な方法

①読書会と、いろいろな教育活動（朝読書の時間、国語科の授業、生徒へのアンケート調査、教師の読書会、道徳や学級活動の時間）を連動させ、読書会を軸として日々の教育活動につながりをもたせる。

②定期的に「保護者・地域との読書会」を開く。市教育委員会・PTA・学校が連携して主催する「継続家庭教育学級」として読書会を開催することで、市の広報誌への開催日時の掲載、学区域の小学校全家庭への通知配布がなされ、本校の保護者だけでなく地域の方にも周知できる。

③図書館司書と緊密な連携を取り、本校の図書館利用の活性化を図り、読書活動推進の土壌を整える。

1.5.　読書会の意義

読書会の特長は、同じ空間で同じ題材を読み、語り合うことで新しい考え方に気づいて自分の考えを広げたり、参加者が連帯感や充足感をもったりできることである。三種類の読書会「生徒の読書会」・「保護者・地域との読書会」・「教職員の読書会」を設定した。読書会のテキストは、以前の国語科の教科書に掲載されているものから選んだ。理由は比較的短い作品が多いため気楽に読書会に参加できること、「保護者・地域との読書会」でも同じテキストを使うので家庭でもテキストを通して子どもと話し合うきっかけができることなどである。本校の読書会のねらいは次の通りである。

①読書会を軸に学校の教育活動全体を有機的に結合し、生徒が読書の楽しさを実感し、読書を身近に感じるきっかけ作りをすること。

②「保護者や地域との読書会」をきっかけに学校と保護者・地域社会がつながりを深め、本校に確かな信頼を寄せてもらうこと。

③読書会で取り上げるテキストについて、教職員が互いに語り合い共通の会話を広げることで、日々の教育活動に積極的に読書指導を取り入れる土壌を培うこと。

2.　読書会を教育活動につなげ、広げる工夫

2.1.　『続岳物語－ふろ場の散髪－』（椎名誠著）の読書会＜実践１＞

2.1.1.　読書会を生徒の様々な活動の場面とつなげる工夫

『続岳物語』の読書会を教育活動とどう結び付け、つながりをもたせたかを次に記す。

①＜朝読書の時間＞

朝読書の時間に副校長が『竜』（今江祥智著）の読み聞かせを行った。「竜」は「子どもの自立」がテーマで「続岳物語」と共通している。読み聞かせの後、学級担任が学級活動の時間で取り上げ、生徒が感想を互いに言い合う時間を設けてもらった。

②＜国語科の授業＞

定期テストの返却日等の時間に、国語科の教師が『続岳物語－ふろ場の散髪－』を音読し、生徒が感想を自由に発表し合った。また放課後の「生徒の読書会」実施後、読書会で語られた感想や意見を国語科の授業でも話題にして生徒にフィードバックしてもらった。（**資料1**）

③＜生徒にアンケートを採る＞

家族との関連性に気づき、つながりを掘り下げるために、朝学活の時間にアンケートを採った。項目は「家族はどんなとき幸せそうか」「家族にしてもらってうれしかったことは何か」「家族を尊敬するのはどんなときか」である。結果は、読書会のテーマと関連させて分析し、読書会で紹介すると共に、学校だより(**資料2**）にも掲載した。

④＜図書館に関連の本を置く＞

図書館司書が『続岳物語』『岳物語』等の関連図書を複数冊用意して図書館に置き、生徒が実物の本をいつでも手に取れるようにした。また主人公「岳」や父親についての生徒の感想を掲示してくれた。

⑤＜「保護者・地域との読書会」で生徒理解の資料とする＞

平成 19 年 5 月 22 日 16：00 ～ 18：00　本校図書館にて実施。参加者 24 名（保護者・地域関係者・校長・副校長・本校教員・図書館司書）。

生徒と同じ『続岳物語－ふろ場の散髪－』をテキストとして取り上げ、生徒の感想やアンケート結果を紹介しながら中学生についての日頃の親、大人の気持ちを率直に語り合った。

2.1.2.「生徒の読書会」の様子

平成 19 年 5 月 18 日 16：00 ～ 17：00　本校図書館にて実施。参加生徒 30 名・副校長・国語科教諭・図書館司書

参加者で「ふろ場の散髪」を音読し、岳少年の成長や幼少の頃からの父親との関係が分かる部分を本文で確認した。「お父さんをどう思うか。」「岳についてどう思うか。」「あなたも同じような経験があるか。」等を発表し合った。小学校高学年の息子と父親が主人公であるため、生徒がテキストの内容を自分のこととして受け止め、活発な意見が言い合えた。また、話し合っているうちに親の立場や気持ちを理解し、受け入れていこうとする姿勢も見られた。部活動等で参加できない生徒も多いが、事前に集計した生徒のアンケートの結果や他の生徒の感想も聞きながら、親に対して改めて考える機会となり、親や家族に対しても穏やかな気持ちになれたようだった。

2.1.3.　実践の成果

①読書会を開催するに当たって、テキストを朝読書、学級活動、国語科の授業でも取り上げ、アンケートの実施結果も迅速に公表することで、『岳物語』のテーマである親子関係に対して生徒や教員が意識する期間をもてた。教員の協力により、多くの機会をとらえ、生徒の感想や思いを収集できた。読書会のテーマに関連したことを職員室で話題にすることで緩やかな連帯感がうまれた。「生徒の読書会」を契機として、教育活動のいろいろな場面で関連させた取組を行い、その取組を読書会に集約し、読書会の様子を生徒や教職員、保護者に提示するサイクルができたことは有効であった。

②読書会の様子は「学校便り」や「四中読書案内」で伝えたり、図書館に掲示したりした。読み合うことで生徒もいろいろな見方に気づき、同世代の気持ちを理解することにもつながった。

③職員室でも、親として、教員が感想を言い合ったり、関連図書を紹介してくれたりした。「生徒の読書会」をきっかけに、読書についての会話が職員室に広がったことは本校の読書指導の活性化のためにも大きな成果である。

④「保護者等との読書会」では、親への子どものまなざしの一端が明らかになり、日頃の子育ての悩みを素直に話し合えた。「『反抗期』でなく『自立期』という言葉を当てることで、いずれ巣立っていく子どもを見守る親の目で接することができる」という意見に多くが頷いていた。読書会の感想として、「参加したメンバーで皆が声を出して輪読することで参加者に連帯意識ができた」「子どものことを本音で話せる場があってうれしい」「親として一歩引いて子どもを客観的に冷静に見るよう努力しようと思う」等があった。

2.2.『走れメロス』（太宰治著）の読書会＜実践２＞

2.2.1.　三種類の読書会を効果的につなげて作品に迫る

『走れメロス』を読書会で扱う際の切り口として、「友情」や「信頼」というテーマではなく「メロスの挫折と復活」の場面を扱いたいと考えた。そこで、テーマ設定を中心に「教職員との読書会」を開いたり、職員室で話題にしたりした。また図書館司書を中心に図書館に来た生徒に事前に感想を聞いたり「保護者・地域との読書会」では「挫折からどう立ち直ったか」を参加者に投げかけたりした。これら三方向からのアプローチをつな

げることで「生徒の読書会」を意義あるものにすることができると考えた。

①＜教職員の読書会ー教師同士で課題図書について話し合うー＞

「挫折と立ち直りをテーマにするのは新しい」「愛と友情がテーマでもいいのではないか」「メロスがふて寝（停滞）しているように見える時は次のステップへの準備をしているのだ」教師が「生徒にとって『せんせんと湧き出る泉』になって立ち直りを助けてやりたい」等の意見も出た。現代は情報も多く、欲しいものも手に入り易い。多様化する社会の中で現代の子ども達は、「信念をもちづらい状況に置かれているのではないか」という意見も出た。

②＜図書館で生徒への事前インタビュー＞

「自分もよくこうやってへこむことがある。たまにどうしようもなくなったりする。」「メロスの気持ちはとてもよく分かる。私も同じ時がある。傷つかないで立ち上がってギャフンと言わせてやりたい気持ちともうだめだという気持ちが行ったり来たりする」という感想があった。今を生きる中学生も苦しんでいることを今さらながら実感した。

③＜「保護者・地域との読書会」での「落ち込んだときどう立ち上がるか」体験談収集＞

平成 19 年7月5日 16：00 ～ 18：00　本校図書館にて実施。参加者 27 名（保護者・学区小学校の保護者・地域の方・市役所生涯学習課職員・市教育支援員・副校長・本校教員・図書館司書）

自分の信じるものを一度否定することで、自分の信念が確信に変わったメロスの心情の変化を読み進めた後「なぜメロスは立ち上がれたのか」「自分はどうやって立ち直るか」を参加者が自分の経験を踏まえて語った。一人ひとりが自分と向き合う時間となった。

2.2.2.　「生徒の読書会」の様子

平成 19 年7月9日 16：00 ～ 17：00　本校図書館にて実施。参加生徒 28 名・副校長・国語科教諭・図書館司書

生徒自身もメロスが自暴自棄になる部分が印象に残り「なぜメロスは立ち上がれたのか」に関心があった。メロスが自分の価値を築いていく過程と、中学生が自分と向き合い、成長していく過程を結び付けた。「『走れメロス』が中学生に人気があるのは、メロスが自分達、中学生に似ているから。例えば「真剣」「必死」「思い込み」「ナルシスト」「無防備」という点に共通点がある」という意見も出た。悩みながらも中学生なりに生き抜く気持ちのもち方等について率直に話し合い、生徒達も心が解放されたようであった。

2.2.3.　実践の成果

①読書会のテーマを何にするかという視点で「教職員の読書会」を開いたり、職員室で度々話題にしたことは、「生徒の読書会」開催が教職員に意識化されるよい機会となった。読書会後に逐語録を回覧すると、それに対する感想や意見を積極的に述べる教員が多くなった。読書会が学校教育活動の一つであるという認識が広がりつつある。

②「保護者・地域との読書会」では、各人の挫折からの立ち直り方として「好きな本を読む」「友達と話す」「忘れて寝る」「何も考えない」等が出た。事後の感想では、「『走れメロス』を読み直して若いときと違う感想をもって新鮮だった」「読書会を通して中学校がとても身近に感じられた」「子育てについてだけでなく、自分自身について振り返る時間となった。」等の感想があった。大人の立ち直り方は生徒の立ち直り方と一緒に掲示した。

③読書会には参加できなかった生徒でも自由に「あなたは落ち込んだときどう立ち直りますか」について、紙に書いて貼っていくボードを作成した。（**資料3**）既に「生徒の読書会」、「保護者・地域との読書会」で出た意見はボードに記入しておいた。職員室の前の廊下に貼って置いたが、生徒は、掲示物の前によく立ち止まり、感想を述べ合っている。来校した保護者等もボードに気づき読んでくれる。好評である。

2.3. 『だから、僕は学校へ行く！』（乙武洋匡）の読書会＜実践３＞

2.3.1. 「生徒の読書会」の様子

平成 19 年9月6日（木）16：00 ～ 17：00 本校図書館にて実施。参加生徒 28 名・副校長・国語科教諭・図書館司書

『だから、僕は学校へ行く！』の読書会では、作者が子どもの頃には気づかなかった親や周囲への「感謝の気持ち」を理解することもねらいの一つであった。しかし、生徒は「感謝」について「ここでいう感謝は、何かを拾ってくれてありがとうとか、これを買ってくれてありがとうという感じのものではなさそうだ」「親に対しては、しみじみ感謝するよりは、日々戦いだ」という意見にとどまっていた。

2.3.2. 違う立場の人の考えを知り、ものの見方を広げる

①＜教職員へのインタビュー＞

「生徒の読書会」で、本校の生徒が周囲の人に対して感謝の気持ちをもつ意識がまだまだ希薄であることが明らかになった。そこで、本校の教職員 24 名に『だから、僕は学校へ行く！』を読んで、インタビューしたものを一覧にした。（**資料４**）「乙武さんが自分の力で何でもできるように思っていたのは、実は親が支えていたからだ」とか「乙武さんも立場が変わって初めて見えてきたものがある」というように生徒には気づかない解釈がたくさんあった。教職員の感想を生徒に知らせると新鮮な驚きをもって聞いていた。

②＜「保護者・地域との読書会」で聞く＞

「保護者・地域との読書会」平成 19 年9月 11 日 16：00 ～ 18：00　本校図書館にて実施。参加者 27 名（保護者・学区小学校の保護者・地域の方・市役所生涯学習課職員・市教育支援員・校長・副校長・本校教員・図書館司書）においても「自分が感謝の気持ちをもったのは何歳ぐらいで、誰に対してか」という質問にも答えてもらった。中学生は家族への感謝の気持ちは希薄な生徒が多い実態を紹介すると、参加者は「いつも我が子に感謝してほしいと思っていたが、もう少し成長するまで待とうと思った」「自分も中学生の頃には感謝の気持ちはなかったかもしれない」とそれぞれの気づきを語り合っていた。

③＜道徳や学級活動の時間に取り上げる＞

上記①②から「中学生に感謝の気持ちをもってほしい」という保護者や教職員の願いが明らかになったため、道徳の年間計画に従って、「温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつ」の内容項目で授業に組み入れてもらう。教員が「自分たちも中学生時代には感謝の気持ちはもてなかった」と言うと、生徒も胸をなで下ろしていた。同時に、成長したら感謝の気持ちをもてる人間に育ってほしいという願いも生徒に伝えた。

2.3.3. 実践の成果

①教員だけでなく、図書館司書・栄養士・用務主事・事務主事・調理員・講師等、いろいろな職種の方に感想や意見を聞くことは新鮮であった。多くの人と語り合う時間がもてたことは、副校長としてもありがたく、本を通して職員間がつながった温もりを実感した。

②生徒は「感謝」にまだ実感がないが、テキストに対する「大人の感想」を聞いて、「感謝」について立ち止まって考える機会がもてた。また「感謝」をもつことがすばらしいことだという認識が育ったことがよかった。

③今回の実践を通して、大人の考えに具体的にふれることで、「大人とつながる」実感を生徒がもつことができた。

3. 学校からの情報の発信と図書館利用の活性化

3.1.「大人が子どもに聞きたいこと伝えたいこと」副校長の講演会実施

平成 19 年 10 月 13 日（土）10：00 ～ 12：00 本校生涯学習教室にて実施。参加者 53 名（本校保護者・本校運営連絡会委員・学区小学校の保護者・地域の方・卒業生・他学区の保護者・市役所生涯学習課職員・市教育支援員・地域の

図書館司書・本校教職員）

講演会のテーマのように、中学生の理解、子育てについて参加者と考えるバックボーンとして、前述の3回の読書会『続岳物語』『走れメロス』『だから、僕は学校へ行く！』の話し合いの様子を紹介しながら進めた。また生徒の読書会、教職員の読書会での意見なども交えながら、本校の教育活動に読書をどう生かしていったかを説明した。講演会の後半では詩二編「地下水」（川崎洋）「生命は」（吉野弘）の「ミニ読書会」を開いた。「『地下水』では、心に地下水をためている（＝大人になる準備をしている）中学生の成長を保護者がじっと見守ることの大切さ＝『続岳物語』に通じるもの」を中心に意見が出た。また「『生命は』では、同じ社会を生きているお互いの関連性、支え合っていることに気づき、感謝すること＝『だから、僕は学校へ行く！』に通じるもの」へ意見交換が発展した。詩二編を読み合うことで今年度の「保護者・地域との読書会」の様子が総合的に参加者に伝えられたことは成果であった。読書会に全回出席してくれた保護者も「それぞれの読書会の意味づけが自分なりにでき、整理された」「もう一度自分を振り返ることができた」との感想を寄せた。また、読書会の企画・運営を引き受けてくれたＰＴＡの第一学年部の役員が、読書会の開催を通してＰＴＡ活動をやり抜いた充実感をもってくれたことが私の成就感にもつながった。加えて、多様な地域の方々も関心をもって参加してくれたことで、第四中学校の教育活動の取組について、発信する好機となった。

3.2.　生徒・保護者の読書活動への啓発、情報の提供や交換

学級文庫の充実にあたって、家庭からの寄贈や保護者の「四中生に読ませたい本」のアンケートの依頼等、保護者と学校がつながる呼びかけを工夫した。保護者から学級文庫への寄贈は約250 冊、アンケートにも 50 冊ほどの回答があり、図書館にない本は早速購入した。購入した書名については「四中読書案内」で知らせる。生徒の読書の様子や教員のお薦めの本、読書会実施の様子等を「学校だより」（管理職発行）や「図書館便り」（図書委員会発行）、「四中読書案内」（図書館司書発行）で逐次、知らせている。

3.3.　図書館活用の活性化

本校図書館は、校舎とは別棟にあり充実した施設である。図書館司書も月曜日から土曜日まで一日6時間勤務しているが、利用者や本の貸出が少ないのが図書館運営上の大きな課題であった。そこで、昨年度の 12 月より、放課後の開館日数を増やすことに努めた。自分の居場所として生徒に図書館を使用して欲しいという願いもあった。放課後は可能な限り、午後5時まで開館した。（18 年度 12 月～3月は 53 回（17 年度同期間は 42 回）、19 年度4月～8月は 85 回開館（18 年度同期間は 61 回）。その結果、図書館はいつも開館しているのだ、という意識が少しずつ生徒に出てきた。利用者数は上記 12 月～3月では、40.7％増、貸出数は 9.8％増、上記4月～8月では利用者数 7.3％増、貸出数は 19％増加した。「本を読みたい一人の生徒を大切にしたい」を合い言葉に、今後も図書館司書との連携を深め、図書活動の推進を支えていく。また本市は土曜日の午前中、図書館の地域解放を行っているがほとんど利用されていなかった。今年度「保護者・地域との読書会」を本校図書館で毎回実施したり、地域で開催される読書に関する行事を掲示したりしたこともあって、少しずつだが土曜日の利用者も増加している。

4.　成果と課題

・ 読書会と様々な教育活動の場面（朝読書・学級活動・総合的な学習の時間や道徳の時間等）で関連づけることで、学校全体に読書を通じて共通の土壌がうまれつつある。３種類の読書会を効果的に関連させること、また読書会を教育活動につなげることで、日々の教育活動がまとまりをもってとらえられる。読書活動

を「本を読む活動」ととらえるだけでなく、学校の教育活動全体を統合する要の役割を果たすよう、今後も副校長として教育課程全体を見通し、カリキュラムの編成に計画的に取り入れていく。

・ 読書会では本を通じて語り合うことで、互いに信頼と安心感を肌で感じる時間がもてた。教職員同士・生徒同士・地域や保護者同士、また三者がそれぞれつながっている一体感を感じるときがあった。各クラスの取り組みとして、朝読書で読んでいる書名なども学級便りで紹介したり「お薦めの一冊」の発表会を行ったり、本を通じて語り合う場面も出てきた。本を媒介として、自分の意見や感想を言い合う活動を今後も大切にしていきたい。

・ 図書館司書の連携のもと、隣接校の第三中学校と合同読書会を２回開催できた。今後も多様な読書活動を工夫し、生徒の読書への関心を高めていく。

・「保護者・地域との読書会」を「継続家庭教育学級」として副校長が４回行った。地域や保護者から「学校が身近に感じられた」という感想をもらえたことはうれしいことである。今後も学校から地域・保護者への情報提供に精力的に取り組み、学校だけでなく家庭も視野に入れた読書活動の推進の土壌を培っていく。第四中学校が地域の読書活動の拠点となり、集った者同士が気軽に「語り合える」学校作りを目指して、副校長として心を傾けて取り組んでいく。

＜資料１＞
「ふろ場の散髪―続岳物語―」（椎名　誠）
生徒感想

質問1．このお父さんをどう思いますか

「息子思いなのだが息子が成長しているのがわからない。小さいころのままだと思っている。」「子どものころ喜んで抵抗なくされていたから、ずっとそのままだと思っている。」「自分が思っている以上に子どもは成長していて自分とかみ合っていない。」「子どものことをわかっていない。自分のやり方で進めようとしている。子どもがどう感じるか、考えていない。」「自分の子どもの変化を理解するのも、親の役目だ。」「うざい。自己中心的だ。」

質問2．お父さんの気持ちがわかりますか

「わからなくもない。」「自分が親になったらこんなことをしてしまいそうだ。」「自分の子どもはいつまでも「子ども」のままだと思いたいのでは。」「わからない。」「お父さんは息子とうまくコミュニケーションをとらなければだめ。でも‥お父さんも少し可愛そう。」「気持ちはよくわかる。でも無理やり散髪は、どうも‥。６才から８年たったら13才か14才。誰でも反抗期だしおしゃれ心が芽生える時期なんだ、とわからなくっちゃ。」「いきなり大好きだった息子に反抗されてショックなことは共感できる。」　・・・中略・・・

質問4．自分とお父さん・お母さんとの関係で、同じような経験がありますか

「散髪は何だかんだ言いながら小５まで親にやってもらっていた。」「『もういやだ』と言ったら『じゃあ、美容院行ってよ。お金出すから』と親に言われた。」「それ以来美容院に行っている（お互いいつまでやるのかな・・という感じだったので抵抗なく変えられた。）」「今でもお父さん（お母さん）に切ってもらっている。」「切ってもらうと、自分だけやってもらっているという、うれしいような気持ちと素人だから思い通りには切ってもらえないかもという不安な気持ちとある。」

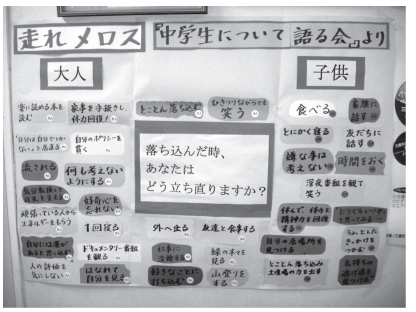
＜資料２＞
＜子どものアンケート結果＞
（学校便りの一部より）

「お父さん、お母さんや家族にしてもらってうれしかったことはどんなことか」では、「こどものために悪いことは悪いとはっきり注意

してくれること」「お小遣いをもらったこと」が 40％で同率１位でした。悪いことを注意してくれるという精神的なものとお小遣いをもらう現実的なものが混在しているところがいかにも中学生の時期を表しています。「たまに褒めてくれること」が 37.8％で３位。ここで興味深いのは「いつも褒めてくれること」の選択肢はたったの８％だということです。「褒める」ことをとっておいて、ここぞというときに、思い切り褒めるのが効果的なようです。学年で差がでた選択肢もありました。「子どもを信じてやりたいことをやらせてくれること」は１年 19％・２年 47％・３年 42％、２年の頃から自立の欲求がはっきりしてくる表れでしょう。２年生という年頃の特徴を顕著に表しているのは、「日頃、べたべたしないこと」の1年 19％・２年 44％・３年１％です。・・・後略・・・

＜資料３＞

『走れメロス』の「落ち込んだときどう立ち直るか」のボード



＜資料４＞

『だから、僕は学校へ行く！』（乙武洋匡）

大人（教職員）の感想

・乙武君の周りの大人

周りの大人（特に父や母）が乙武君が何ができて何が弱いか、何をやりたがっているかをよくつかんでいて実際にできるように支えてきた。子どものニーズに合った支え方ができる母はすごい。・弱いところをちゃんと見てくれる、等身大の自分を分かってくれる大人の存在は大きい。障害がなくても、みんな弱いところはもっている。例えば、前に出られない。はっきりものが言えない。気持ちを伝えづらい。友達ができづらい・・・。・父母が立派。チャレンジさせる環境を整えている。

支えられていることへの気づきと感謝の気持ち

・乙武さんは、人一人が生きていくことの大変さ、支える人がいることのありがたさに思い至って、涙が止まらなかった。・乙武さんが教員の目で書いているところもあり、立場が変わったことで見えてきたこともあるのだろう。大人は責任もとらなければいけない。そのぎりぎりのところを探して乙武さんにやりたいことをやらせてくれていたことに気づいた。・乙武さんも視野が広がった。自分と他の人たちとの関連性に気づくようになった。「自分が自分が」という気持ちからが薄れ、感謝の気持ちが生まれてきた。・生き生きと生きる場を与えてもらってきたことへの感謝の気持ち・乙武さんのような立場の人の発信が大切。

中学生と感謝の気持ち

・中学生はうまくいかないと人のせいにしたり、頭で少しは分かっているんだけど、感謝の気持ちはまだまだ。・乙武さんが、p119「僕は子ども心にそうして心配されることを何より暑苦しく感じていたし・・・」とあるように、中学生でも大人の配慮に気づくのはまだ難しいのかも。・さりげない大人の支援は大きいが、それに気づくのはすごく先のことかもしれない。・けんかもコミュニケーションの一つ。娘が悪態をつくと本当の母にはこういうふうに言えるんだなと思って聞いているときがある。